第六回世界俳句協会日本総会
二〇一一年四月二十九日　東京

清水国治　日本
Kunharu Shimizu　Japan

いやはや大変な年になってしまった。三月十一日に起こった災害は小さな島国・日本の歴史において大きく記される出来事になるだろう。

世の中には突然起こることはない、と言われる。突然起こる、と思われる地震さえも実はそうではないらしい。それは専門家の解説にも明らかなように日々の地球の動きがストレスのように溜まっていき、ある時それを発散する、それが地震だという。原発の事故も突然のように見える、がしかし、様々な報道から明らかになっていることは、軽卒でその場しのぎの判断の積み重ねが今回の事故に繋がっている。

今回の出来事の背景には、これまでの日本という国が歩んできた日々の積み重ねがある。長い年月の間に、この国は実は大きな豆腐の上に乗っているようなもの、という認識が希薄になっていたと思われる。豆腐には心がないからストレスを発散する時、その上で暮らす人間に対する配慮はない。反面、人間には心があるから、それを賢く働かし、再認識を元に何を優先的にするのかを定め、それを国造り、地域社会造りに活かしていか

なければならない。

このような歴史的転換期となる年に、第六回世界俳句協会日本総会は開催された。何となく心晴れない状況が続く中ではあったが、２０数名の参加者が集い、無事に総会を開催することができた。

今年は大変な年になってしまったが秋には、当協会としては二年ごとに開催している世界俳句協会大会（以下 WHAC6）を催すことになっている。さらに、第二回東京ポエトリー・フェスティバル（以下 TPF）も同時開催する予定だ。気持ちを切り替えて大きな行事に向かっていく姿勢が必要だ。

総会では、まず、TPF の副ディレクターである八木忠栄氏と田村雅之氏の紹介があり、その後、参加者の自己紹介とそれぞれの近状報告の機会をもった。紹介・報告の中には国内の俳句の現状に踏み込んだものや、海外やネット社会での動きなど、有意義な発言も多く含まれた。WHA発行の『世界俳句二〇一一　第七号』については、号を重ねるにつれて質の高い翻訳が掲載されるようになってきた。俳句の持つ詩的な要素を的確に伝えるためには良質の翻訳が不可欠である。それは、一朝一夕に出来る事ではなく、積み重ねの成果として現れてくるものなのだろう。

WHA が毎月開催している俳画コンテストについては、WHAC6 記念コンテストを企画するよう要望が出され、実施の方向で検討することになった。担当の私としては、コンテストほ発表はあくまでウエブ上でするのが良いと思っている。送られてくるデータがプリントアウトには向かないものが多いし、何よりも大会時に適当な展示場所がないことだ。このような点を検討したいと思っている。

WHAでは国外で開催される行事や会議に代表者を送っている。今回は「世界俳句フェスティバル・ペーチ二〇一〇」について木村聡雄氏が報告。「ソウル大学国際会議」と「シャール国際詩祭」については夏石番矢氏がそれぞれ報告を行った。七月には夏石氏がコロンビアで開催される「メデジン国際詩祭」に参加し、九月開催の TPF2 と WHAC6 のジョイント行事をプロモートしてくるとのこと。

その他、国内で俳句イベントが開催されている。「俳句朗読と弦楽の夕べ」（与野で開催、丹下）、「独演！俳句ライブ一七」（新宿で開催、夏石）、「俳句朗読＆ハープ・尺八演奏」（富士見で開催、野村）が催され、音楽と言葉がいっしょになることの面白さを伝えるのに一役かった。

議事の最後にはTPF事務局長の石倉氏からTPFの意義などについて説明があった。世界諸国から日本に詩人を招いての行事は国内では稀で、TPFは国際的な交流を深める上で貴重な行事。この点について参加者の理解と協力を求めた。そのあと、鎌倉氏が会計報告を行った。現在会員は一五七名。収支としては繰り越し金が僅かに増えたとのこと。

会議の後は、参加者がそれぞれ舞台に立ち、俳句、川柳、詩の朗読を行った。東日本大震災が合った直後だけに、そのことを詠んだ作品が多くあった。特に世界各地から寄せられた句は量的にも内容的にも圧巻だった。これらは夏石、木村、堀田各氏が手分けして朗読された。東日本から参加した松田正徳氏は、直接被災しなかったものの、被災地に度々出かけて救援にあたっている。氏の朗読は、日英句を紙に書きだして紙芝居風にみせながらの朗読で興味を引かれた。後日談だが、松田氏が朗読した内、次の句を英訳し直し、俳画を描いた。

春岬いつまで待っても帰らない
A cape in spring—
waiting, waiting but
no sign of return

震災の句を私が俳画にしたものが他にもあり、松田氏の分も合わせて8点が米国のイースタン・ケンタッキー大学発行の文芸誌「ジェリー・バケット（Jelly Bucket）」の秋号に見開きカラー8ページで掲載されること

になった。

俳句朗読でその他印象に残ったのは、鎌倉佐弓氏の次の句

手のひらのこの水が国を壊すとは

This water in my palm

what is the water

destroying my country

そして、中塚唯人氏の句

自在に春を操り桜咲かせたのはだれ

などが印象に残った。それぞれの朗読はビデオ録画され、ユー・チューブに掲載されている。WHAのウエブサイトの movieからアクセスできるようになっている。